

南三陸町を訪問して

加用美代子(京都)

7月17日(日)、東京都内で『季刊保育問題研究』の編集委員会を終わった後、編集委員会メンバー6人で上野駅に直行し、仙台に向かいました。震災後、精力的に被災地に入って支援の方策を探り、組織化をしている全国保問研代表の鈴木牧夫さんから事前にお誘いを受け、皆一も二もなく希望してのことでした。

翌朝、集合場所の仙台駅には、全国保問研事務局の佐々木さんや、仙台保問研のみなさんも駆けつけ、総勢11人がマイクロバスで出発しました。仙台東部を走る車窓には、瓦礫がまだ多く残る土地や、海水の塩分で稲を植え付けられない田んぼが延々と続き、言葉もなく眺めてしまいました。

その後車内では、自己紹介をしつつ、3.11当日の市内の保育所でのようすをお聞きしました。子どもを守る保育者の必死の、しかし沈着な行動もさることながら、職場から何時間も歩いてお迎えに来られたお母さんや、避難先の中学校で夜、子どもたちが不安がらないようにと、自動車を集めてライトで照らし続けてくれたという中学の先生方のことなど、それぞれの人の思いが偲ばれるお話がたくさんありました。

目的地の南三陸町で最初に寄ったのは、ベイサイドアリーナ(体育館)です。ここは、町の中心街からは少し離れている場所で、町の行政や社協など各種組織の仮事務所が多数並び、また、ボランティアセンターも置かれているところです。駐車場周辺にはボランティアの方々のテントが点々と張られていました。ここで、当地在住の佐藤真穂さんと落ち合い、以後バスに同乗して案内をしていただきました。佐藤さんは、仙台市で10年ほど保育者をした後、結婚されて当地に移られ、現在は二人の小さいお子さんを育てておられます(佐藤さんからののお便りが保問研HPに掲載されています)。この地域では神社や学校がみんな高台にあるのを不思議に思っていたけれど、今度のことでその意味がわかったと語っておられました。

テレビなどの報道で目に焼きついている中心街を抜け、まず、佐藤さんのお宅もある歌津地区に向かいました。お住まいは高台のため無事で、この周辺の家々への救援物資の配給基地になっているとのこと。玄関脇にペットボトルの水等たくさんの物資が積み上げられ、また庭には、ボランティアのみなさんが近辺の方々のために作られたという、広くしっかりとしたお風呂がありました。庭に立つと空気が香しく、静かな美しい緑の風景が見渡せます。こんなに穏やかな土地で、大地や海が荒れ狂ったのだということが、改めて心に突き刺さってきます。見下ろした木々の間のあちこちに、夥しく積まれた黄色や青の球形の物体が見えたのでお聞きすると、漁に使う浮き玉だそうで、漁師さんたちはこうして浮き玉を避難させ、毎日海に出て海中の瓦礫を引き上げておられるそうです。佐藤さん宅に保問研から町の保育所への果物などの物資を託し、また、編集委員で名古屋市のけやきの木保育園園長の平松さんから、園の保護者の方々が寄せ書きされた布が渡されました。そこには真ん中に「いっしょに大きくなろうね」と書かれていて、距離は離れていても、同じ親として伝えたい思いが胸に沁みてきました。

次に、同地区の伊里前保育所に案内していただきました(南三陸町では五つの保育所のうち、二つが被災して使用できないため、他の三つに統合して再開されており、その一つ

です)。近くを通っている気仙沼線の歌津駅はかなり高い所にあるように思ったのですが、駅舎は半壊し、線路が千切れてぶら下がっている様子に、地震と津波の猛威をまざまざと感じました。訪問した18日は休日でしたので職員さんはおられず、現在お子さんをこの保育所に通わせている佐藤さんから色々お聞きしました。高台にあるここにも水は押し寄せ、園庭や保育室の床が浸水したそうです。午睡からまだ十分目覚めない子どもたちを抱いたりおぶったりして裏山の道を登って逃れた先生方は、どんなお気持ちだったでしょう。訪問日現在でも水道が復旧しておらず、パンと牛乳の簡易給食とのことでした(その後、編集委員で仙台保問研所属の三浦和恵さんから教えていただいた最新情報では、7/27には、おにぎり野菜ジュースやヨーグルトが配られたそうで、やはりおにぎりだと子どもたちの食が進むようです)。伊里前保育所は、漁業の盛んな町らしい、魚をアレンジした屋根のデザインが可愛い園舎です。この屋根を見ながら、漁業をなりわいとされる保護者もたくさん居られるであろうと、改めて漁業の復活を願ったことでした。宮城県では復興計画がさまざまに取沙汰されているようですが、是非とも地元の方々の思いを踏まえたものであることを願います。

この後、志津川地区に戻り、志津川保育所にも案内していただきました。高台にある保育所からは、志津川湾を前に平地が広がる町の中心が見渡せます。病院、防災会館などいくつかの建物やその骨格が残るのみの土地のあちこちで重機が動き、瓦礫を仕分け、積み上げています。あそこにはスーパーマーケットやおいしいケーキ屋さんがあった、そこには由緒ある建物の図書館があって、大好きだった、と語ってくださる佐藤さんの言葉が少し震えて、胸を衝かれました。

最後に、海際に立つ「ホテル観洋」に寄りました。道路の向かい側にこのホテルの従業員さん用の託児所「マリンパル」(保育士ボランティア派遣地)があり、そこで先生からお話を聞くことができました。園内ホールの舞台カーテン裏には、全国から届けられた物資が積み上げられており、日常の保育に加えて、それらを整理したりすることにも労力を注がれているのだらうと思われます。先生のお話では、ホテルには400人ほどのご家族が避難されているそうですが、このところ余り部屋から外に出られない方が多いとのことで、子どもたちのことを心配しておられました。大人の方たちには、震災直後の夢中な時期を少し過ぎてのさまざまな思いや、身体的・精神的な疲労など、私たちには容易には伺い知れない状況があるかと思えます。他方で、幼い子どもたちの日々の生活や遊びについて、何らかの支援が出来ればとも考えさせられました。

今回の訪問は、わずか半日の限られた範囲のものですが、被害の激甚さを目の当たりにし、町と暮らしを再建していく道のりの長さや困難さを痛感させられました。そのような中で、学校や幼稚園・保育所職員の方々の多くは、ご自身も被災されながら子どもたちを守り、ずっと頑張り続けて来られたはずで、疲労も積み重なっているに違いありません。どのような支援がふさわしいのか、また、私たちそれぞれが自分の場でできることは何か、問い続けていきたいと思えます。

佐藤さん、仙台のみなさん、まるで逆の立場のようにお世話になってばかりでした。本当にありがとうございました。報告を綴るのがこのように遅くなり、申し訳ありません。

(2011年7月29日)